

トニック・ソルファの掛図

津 上 智 実

神戸女学院の図書館には貴重な資料が多く、その中には明治期の音楽教育の実態を知る手掛かりとなる掛け替えのないものも含まれている。そんな「図書館の宝物」を紹介するシリーズとして、初回はヴァーグナーの楽劇のピアノ編曲版(1905年)^①、2回目はサイン入りの音楽理論書(1895年頃)^②を取り上げた。第3回の今回は「トニック・ソルファの掛図」を紹介したい。

1) トニック・ソルファ

トニック・ソルファ(Tonic Sol-fa)とは、19世紀半ばに英国で発明された簡易譜による視唱の指導法^③である。この指導法の確立者として知られるジョン・カーウェン John Curwen(1816-1880)は、次のように説明している。

トニック・ソルファ法の主な特徴といえば、音楽を音楽の記号から切り離すということである。音楽は音からなるのであって、四分音符や八分音符からなるのではない。また階名の文字が音を生むのでもない。トニック・ソルファ法の教師は、自分が働きかけるべきなのは生徒の耳と声である^④と考える。そして、最初はまったく記号を使わないで教え、そしてその後も、生徒に既知のものを聞き分けさせたり、思い出させたりするのに必要とされる限りにおいてのみ、記号を少しずつ導入していくのである。これはペスタロッチの原則であり、ペスタロッチにしたがったすべての教育学者の原則である^④。

トニック・ソルフア法は、相対音高をシラブル(d=ド、r=レ、m=ミ、f=ファ、s=ソ、l=ラ、t=ティ)で示す文字譜としてのトニック・ソルフア譜の使用によって、また、それに先立つパターン(教師の歌う範唱)、モデュレイター(転調の関係を示す表)、ハンドサイン(相対音高を示す手指の形)の併用によって、五線譜の持つ欠点を補うものであり、「誰でも楽々と、しかも正しく歌えるようになる簡単な指導法」として広く国際的に普及した。英国では1860年に公立学校の音楽教育に取り入れられ、また宣教師たちによって世界各地にもたらされた。現在もなおコダーイ・システム等に引き継がれて広く活用されている。

日本では、音楽取調掛(1879年創設、1887年に東京音楽学校に改組)の長であった伊澤修二(1851-1917)が「1884年以来ロンドンの A. J. エリス氏と手紙を交わしており、一度トニック・ソルフア・システムについても十分に論議した。その際、エリス氏はカーウエンの *Musical Theory* や *Teacher's Manual* のようなトニック・ソルフアの本を何冊か送って下さった」と横浜発行の英字新聞『ジャパン・ガゼット *Japan Gazette*』掲載の記事(1889年11月1日付)が伝えており、^⑤官立の音楽教育においても早くから検討されていたことが知られる。

一方、キリスト教の宣教師ジョージ・オルチン George Allchin(1852-1935)は^⑥1889(明治22)年9月20日に横浜のフェリス和英女学校(現在のフェリス女学院)でトニック・ソルフア紹介の講演を行なって、次のように述べた。

日本に滞在中、幸運なことに、日本人に声楽を教えるためにさまざまな方法を試すことができた。7年間にわたり、大阪の大きな女学校と複数の大きな教会で声楽を指導してきた。現在女学校の在籍している400人の生徒のうち、高学年の250名を毎週指導している。最初は文部省が作った Charts と Music Readers を用い、とても便利だと思った。次に、低学年で modulator とトニック・ソルフアの練習を黒板に書いて行なったところ、はるかに良い結果が得られたため、五線譜による文部省の教材とトニック・ソルフアを併用している。^⑦

音楽が得意で「歌う宣教師」として知られたオルチンは、1882(明治15)年の来日以来、継続的に歌の指導に携わった経験から、日本人の音楽教育におけるトニック・ソルファ法の有効性を実感していたものであろう。

同じく1889(明治22)年には、8月に来日したイギリス出身の音楽教育家エミリー・ソフィア・パットン Emily Sophia Patton(1831-1912)によって横浜でトニック・ソルファの教授活動が開始され、後に東洋音楽学校(現在の東京音楽大学)の創設者となる鈴木米次郎(1868-1940)が師事している。^⑧

1891(明治24)年には、このパットンが中心となって、5月29日にトニック・ソルファ50周年の記念祝典が横浜で開かれた。同年7月17、18日にロンドンで行なわれた50年祭の展示と式典では、オルチンが日本の代表として参加・挨拶し、君が代をソルファ譜で紹介したという。^⑨

1894(明治27)年10月には、パットンとその弟子アダ・ブロクサム Ada Bloxham が東京音楽学校の唱歌と洋琴ないし和声の教務嘱託として採用されたが、次年度以降は継続されず、東京音楽学校にトニック・ソルファ法を導入する試みは不成功に終わっている。^⑩

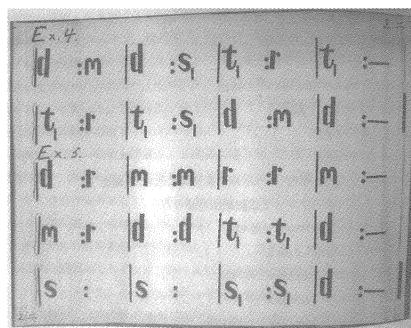
他方、鈴木米次郎はその後もトニック・ソルファ教育を唱歌会や高等師範学校附属小中学校等で実践し、カーウエンの指導書を翻案した『簡易唱歌法』(1892年)や『新式唱歌、一名トニックソルファー唱歌集』(1897年)など教材の出版も行なった。^⑪ 1907(明治40)年に東洋音楽学校を設立してからもトニック・ソルファ法を重要な教授法として活用し、1919(大正8)年の同校夏期講習会では「トニックソルファー唱歌教授法」の講座も開設された。^⑫

2) 神戸女学院のトニック・ソルファ掛図

このように日本においては官立の音楽学校よりもむしろ宣教師たちによって推進されたトニック・ソルファ教育は、神戸女学院においても重用された。本学図書館に残された多数のトニック・ソルファの掛図は、それを証しするものである。

本学に伝わるトニック・ソルファの掛図は19本に上る。内2本は市販品だが、

残りの17本は手製で、いずれも手間をかけた丁寧な作りになっている。紙製の15本は、各々8枚の紙を張り合わせて大きな1枚とした上で、縦横に鉛筆でガイドラインを引き、それを目安にきっちりと揃った形で、音高シラブル(d, r, m, f, s, l, t等)や小節線等が黒インクで丁寧に書込まれている(写真①参照)^⑬。布製の2本はいずれも音階図で



写真① 掛図 No.15(紙、手製、82.5×111cm)

あるが、よく見るとどちらも余分な記号や文字をアプリケで消してあって微笑ましい(後述)。縦長の掛図は上下に、横長の掛図は左右に、棒ないし竹竿が通してあって、それを軸にくるくると巻いて仕舞うことができる。棒の上部には紐が取り付けられていて、それを黒板上部のフックに引っ掛けて掲示するよう工夫されている。大きさは手製の紙製のもので縦85センチメートル前後、横115センチメートル前後あるので、教室で黒板に掛けるとかなりの人数で同時に読むことが可能である。

これらの掛図については、2004年10月29日に図書館による写真撮影^⑭と明細表作成が行なわれ、その際に与えられた番号で現在は整理されている。しかしながら作業順に与えられた番号であるため、内容と連動していないという問題があって、全体像が掴み難い。

そこで今回、改めて掛図の記載内容が読み取れる形で写真撮影を行ない^⑮、その記載内容を分析して、教育内容に従う形で整理した。その結果を示すのが、「表1 トニック・ソルファ掛図一覧」(次頁以下参照)である。^⑯

これらの内、布製の手製の2本(Nos.1, 2)は縦長の音階図で、No. 1は5音(s, d, m, s, d¹)で主和音(ドミソ)の構成音のみ、No. 2は9音(s, t, d, r, m, s, t, d¹, r¹)で主和音に属和音(ソシレ)の構成音が加わったものとなっている。前者については「ファ f」音の位置を示す黒点が誤って「ソ s」の半音下の位置に書かれてしまったのを、上述のようにアプリケで丸く覆って消してある(写真②と③参

表1 トニック・ソルファ掛図一覧 (2014年12月30日、津上智実作成)

(1)

No.	掛図 番号	Ex. 番号	内容	備考	寸法 (cm)	旧番号
1	—	—	[音階図] 5音(s ₁ , d, m, s, d ¹)	布、 手製	120× 43.5	2
2	—	—	[音階図] 9音(s ₁ , t ₁ , d, r, m, s, t, d ¹ , r ¹)	布、 手製	155× 45	1
3	—	—	[リズム譜] 3種 音価4種(付点二分音符、二分音符、四分音符、八分音符)、休符1種(四分休符)、2/4、8小節 音価4種(二分音符、付点四分、四分音符、八分音符)、休符2種(全休符、四分休符)、2/4、8小節 音価4種(二分音符、四分音符、八分音符、十六分音符)、休符1種(四分休符)、2/4、8小節	紙、 手製	83× 112	4
4	四	Ex. XII Ex. XIII	4音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価2種(二分音符、四分音符)、8小節 4音(d, m, s, d ¹)、3/4、音価3種(全音符、二分音符、四分音符)、8小節	紙、 手製	84.6× 120.7	11
5	五	Ex. XIV Ex. XV	4音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価2種(二分音符、四分音符)、16小節 4音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価3種(二分音符、四分音符、八分音符)、4小節	紙、 手製	88.5× 116.5	17
6	六	Ex. XVI Ex. XVII Ex. XVIII	5音(d, m, s, d ¹ , m ¹)、2/4、音価2種(四分音符、八分音符)、8小節 4音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価3種(二分音符、四分音符、八分音符)、8小節 4音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価2種(四分音符、八分音符)、4小節	紙、 手製	85× 114	5
7	七	Ex. XIX	4音(d, m, s, d ¹)、3/4、音価3種(全音符、二分音符、四分音符)、16小節	紙、 手製	84.7× 119.5	16
8	八	Ex. XX Ex. XXI	3音(d, m, s)、3/4、音価3種(全音符、二分音符、四分音符)、12小節 4音(s ₁ , d, m, s)、2/4、音価2種(四分音符、八分音符)、4小節、弱起	紙、 手製	84.5× 121	12
9	九	Ex. 22 Ex. 23 Ex. 24	4音(s ₁ , d, m, s)、2/4、音価3種(二分音符、四分音符、八分音符)、8小節 4音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価3種(二分音符、四分音符、八分音符)、8小節 4音(s ₁ , d, m, s)、2/4、音価2種(四分音符、八分音符)、4小節	紙、 手製	84.6× 115.5	9
10	十	Ex. 25 Ex. 26	3音(d, m, s)、3/4、音価3種(全音符、四分音符、八分音符)、8小節、2声 5音(s ₁ , d, m, s, d ¹)、2/4、音価2種(四分音符、八分音符)、4小節	紙、 手製	85× 119.5	7
11	十一	Ex. 27 Ex. 28	4音(d, m, s, d ¹)、3/4、音価1種(四分音符)、休符2種(二分休符、四分休符)、8小節 4音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価3種(二分音符、四分音符、八分音符)、8小節	紙、 手製	85× 121	10

(2)

No.	掛図 番号	Ex. 番号	内容	備考	寸法 (cm)	旧番号
12	十二	Ex. 29 Ex. 30	5 音(s ₁ , d, m, s, d ¹)、3/4、音価 3 種(二分音符、四分音符、八分音符)、8 小節、弱起 4 音(d, m, s, d ¹)、2/4、音価 3 種(二分音符、四分音符、八分音符)、8 小節	紙、 手製	84.5× 119.5	14
13	2. 一	Ex. 1 Ex. 2 Ex. 3	[リズム譜] 3 種 2/4、音価 4 種(二分音符、付点四分音符、四分音符、八分音符)、休符 1 種(四分休符)、8 小節 2/4、音価 4 種(二分音符、付点四分音符、四分音符、八分音符)、休符 1 種(四分休符)、8 小節 2/4、音価 4 種(二分音符、付点四分音符、四分音符、八分音符)、4 小節	紙、 手製	85.5× 114	13
14	2. 一	Ex. 1 Ex. 2 Ex. 3	5 音(d, m, s, t, r ¹)、2/4、音価 2 種(二分音符、四分音符)、8 小節 6 音(s ₁ , t ₁ , d, r, m, s)、2/4、音価 2 種(二分音符、四分音符)、8 小節 5 音(s ₁ , t ₁ , d, r, m)、2/4、音価 2 種(二分音符、四分音符)、4 小節	紙、 手製	82.5× 111.3	6
15	2. 二	Ex. 4 Ex. 5	5 音(s ₁ , t ₁ , d, r, m)、2/4、音価 2 種(二分音符、四分音符)、8 小節 5 音(s ₁ , t ₁ , d, r, m)、2/4、音価 2 種(二分音符、四分音符)、12 小節	紙、 手製	82.5× 109.2	3
16	2. 三	Ex. 6 Ex. 7	6 音(s ₁ , d, r, m, s, t)、3/4、音価 2 種(全音符、四分音符)、8 小節 6 音(d, r, m, s, t, d ¹)、2/4、音価 2 種(二分音符、四分音符)、8 小節	紙、 手製	82.5× 111	8
17	3. 一	Ex. 1 Ex. 2	8 音(d, r, m, f, s, l, t, d ¹)、4/4、音価 4 種(全音符、二分音符、四分音符、八分音符)、休符 1 種(四分休符)、16 小節 5 音(d, r, m, f, s)、4/4、音価 4 種(二分音符、付点四分音符、四分音符、八分音符)、休符 1 種(二分休符)、8 小節	紙、 手製	83× 110.5	15
18			「音階圖」[Eb, Bb, F, C, G, D, A] 売捌所、大阪西区京町堀四丁目、吉東任天書屋	布、 既製	152.5 ×91	18
19			The Time Chart, ed. by John Curwen	紙、 既製	156.5 ×91.2	19

【凡例】 No. = 今回の内容調査に基づいて新たに与えた通し番号。

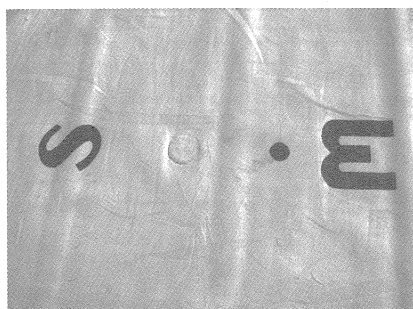
掛図番号 = 掛図表面の右端に毛筆で記入された漢数字の番号。

Ex. 番号 = 掛図表面の左側に手書きで記入された練習課題番号(アラビア数字のものとローマ数字のものがある)。

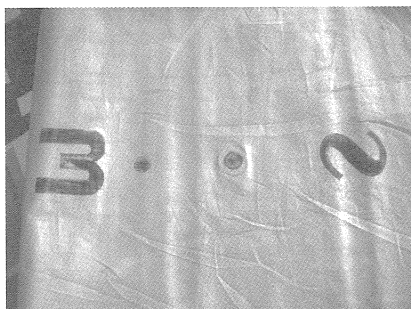
内容 = 掛図のトニック・ソルファ譜の記載内容を書き抜いて文字情報としてまとめたもの。

寸法 = 縦横のサイズを示す。Nos. 1, 2, 18, 19 は縦長、それ以外は横長の掛図である。

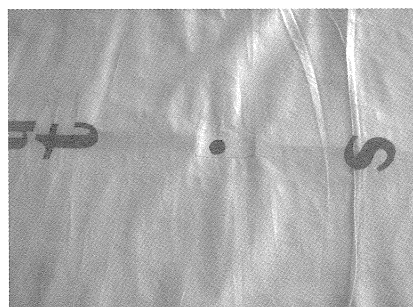
旧番号 = 2004年10月29日の図書館による写真撮影と明細表作成に当たって与えられた番号。作業順に与えられた番号であるため内容と連動していない。



写真② 掛図 No. 1 の修正箇所、表面



写真③ 同左、裏面



写真④ 掛図 No. 2 の修正箇所、表面



写真⑤ 同左、裏面

照)。また、後者については誤って「ラ 1」のシラブルを書いてしまったのを、同様に細長い布でアップリケして覆い隠した上で、改めて黒点が記入されている(写真④と⑤参照)。

No. 3 はリズム譜で、3 種の基本的なリズムが学べるようになっている。

No. 4 から 12 までの 9 枚は、いずれも主和音の構成音(ドミソ)を 3 音から 5 音用いた練習課題となっている。No. 10 のみ 2 声の課題とされ、それ以外は単声の課題である。

No. 13 はリズム譜で、3 種のリズム課題が書き込まれている。

No. 14 から 16 までの 3 枚は、主和音に属和音(ソシレ)の構成音が加わった 5 音ないし 6 音による練習課題で、掛図番号に「2. 一～三」とあるところからも第 2 段階の学びであることが明らかである。

No. 17 は、主和音に属和音と下屬和音(ファラド)の構成音が加わった 8 音からなる課題(Ex. 1) (ここで初めて 1 オクターブの 7 つの音階音が揃う)と 5 音からなる課題(Ex. 2) (前者の前半に当たるドレミファソ)とから成り、掛図番号に「3. 一」とあるところからも第 3 段階の学びであると知られる。

No. 18 は市販の布製の大幅で、一番上に「音階圖」と印刷されているが、実際にはフラット 3 つの調からシャープ 3 つの調までの転調関係を示すモデュレーターである。下部に「売捌所、大阪西区京町堀四丁目、吉東任天書屋」とあり、このような教材が大阪で売り捌かれていたことが窺われる。

No. 19 はロンドンで出版されたジョン・カーウエンの「音価表 The Time Chart」で、トニック・ソルファ譜におけるリズムの表記法の一覧となっている。

3) 神戸女学院のトニック・ソルファ教育

ところで、これらの掛図を手作りして授業で活用していたのは一体誰であったろうか？

まっさきに思い浮かぶのは、本学の音楽教師エリザベス・タレー Elizabeth Torrey (1848-1921) である。タレーは 1890 年にアメリカン・ボードの宣教師として来日し、始め新潟で、翌年から大阪の梅花女学校で音楽を教えた。優秀な音楽教師の確保に苦勞していた神戸女学院では、(1) 1894 年から囑託として、(2) 1896 年からは専任としてタレーを迎えた(専任在職 1896-1909 年)。その事情を神戸女学院同窓会誌『めぐみ』は次のように伝える。

- (1) 音楽教師 ケント氏は夏以来病魔に冒され其任に耐へざるため外にありて療養せられ其代りとしてターレー氏を楽器のオルチン氏を唱歌の教師として暫時其任を委託す。

『めぐみ』 第 10 号 (1894 年 12 月発行) 21 ページ

- (2) タレー女史 ケント女史のご病氣と長田花子の当院を去られ志ため音楽

科の教授は在大坂同女史に一切之が担当を委任することとなりたり。

『めぐみ』 第12号(1895年12月発行)15ページ

タレーの常勤着任(1896年)によって音楽教育が順調に進み、トニック・ソルファ法の教育効果が上がっていたことが、ボストンで刊行されていた婦人伝道団の機関誌『生命と光 *Life & Light*』に掲載された次の記事(1897年)から窺われる。

音楽 [教育] はすべて順調に進んで、タレー女史の注意深い訓練の成果を示すと共に、女史が心から信じているトニック・ソルファ・システムからもたらされた恩恵を示している。The music all through was fine, and showed the effect of Miss Torrey's careful training, and the benefit to be derived from the tonic-sol-fa system, in which she so heartily believes.^⑰

女学院在職中、アメリカ一時帰休を終えて帰院したタレーは『めぐみ』第25号(1900年12月発行)に「神戸女学院の元学生たちと卒業生たちへの手紙 A letter to old Kobe College girls, and alumnae」(18-20ページ)を寄稿したが、この書簡体の記事においても讃美歌「主よ、みもとに More Love To Thee, O Christ」のトニック・ソルファ譜を掲げて、その読み方を説明している。

タレーは目を痛めて1909年に女学院を離任し、晩年はアメリカ在住で1921年に没した。その翌年、『めぐみ』に次のような記事が出たことも、タレーとトニック・ソルファ法との強い繋がりを示唆して余りある。

「故ミス・タレー師によりて作られた音楽初学者の為のタニックソルファの本 Version of libert が沢山御座います故同窓生有志の方にお分け致し度う存じます。御望みの方は九月一日から十月終までに音楽部へ御申込下さいませ。一部貳拾五銭で御座います。神戸女学院音楽部」

『めぐみ』 改号 2 号(1922年)14ページ

このようにトニック・ソルファ法による音楽教育を徹底して行なったのはタレーの功績であり、トニック・ソルファ掛図の作成もタレーの参与ないしは主導によって行なわれたと考えるのが自然であろう。

しかしながら、タレーがそもそものようにしてトニック・ソルファ法と出会ったのか、そこにタレーよりも8年前に来日して、日本での唱歌教育においてトニック・ソルファ法の効果を熟知していたオルチンの影響がなかったのかどうかといったことについては、今後、関連の宣教師文書等の精査によって次第に明らかになっていくであろう。掛図の教育内容の精査と共に、稿を改めて論じたい。

なお、今回の掛図調査に際して、東京藝術大学(音楽取調掛から発展)、東京音楽大学(鈴木米次郎が創設)、横浜のフェリス学院大学(パットンの弟子ジュリア・モルトン Julia Moulton が音楽教師として教授¹⁸)、大阪の梅花女子大学(オルチンとタレーが教授)にトニック・ソルファ掛図の所蔵の有無を問い合わせたところ、いずれにおいても所蔵していないとの回答を得た。¹⁹ 震災や戦争、移転等によっても失われることなく、今日まで伝えられている本学のトニック・ソルファ掛図(全19本)の史料的な価値の高さが改めて認識される。

註

- ① 津上智実「図書館の宝物から(その1)シャーロット・デフォレストの楽譜：『ヴァーグナー楽劇選集』(ピアノ独奏用編曲版)」神戸女学院史料室編『学院史料』第24号(2010年)35-42ページ。
- ② 津上智実「図書館の宝物から(その2)ジョージ・コールマン・ガウ著の音楽理論書『音楽の構造』(1895年頃)」『同書』第26号(2012年)12-20ページ。
- ③ Grove Music Online の'Tonic Sol-fa'の項には「19世紀半ばにサラ・アンナ・グラヴァー Sarah Anna Glover [1786-1867] によって発明され、ジョン・カーウェン John Curwen [1816-1880] とジョン・スペンサー・カーウェン John Spencer Curwen [1847-1916] とによって広範に普及された記譜の形式と視唱のシステム」とある(2014年12月24日アクセス)。
- ④ 東川清一『読譜力』春秋社、2005年、151ページ。
- ⑤ 武石みどり監修、東京音楽大学創立百周年記念誌刊行委員会編『音楽教育の礎、

鈴木米次郎と東洋音楽学校』春秋社、2007年、36ページ。

- ⑥ 米国伝道会日本派遣宣教師。1882年来日、大阪伝道区で活動。教会音楽の指導に力を入れ、組合派教会、長老派教会の共通讃美歌集『新撰讃美歌』（1891年）の編集委員として尽力した。1906年から1918年まで神戸女学院理事。
- ⑦ 武石みどり、前掲書、37ページ。
- ⑧ 同書、27-30、46-48ページ。
- ⑨ 同書、48ページ。
- ⑩ 同書、61-62ページ。
- ⑪ 同書、53ページ。
- ⑫ 同書、137ページ。
- ⑬ この掛図は『学院史料』第17号（1999年10月）53ページに写真が掲げられてすでに公開済みであるが、他の掛図はこれまで公開されたことがない。ただし「初期神戸女学院」の授業では、年に一度、図書館から掛図を借り出して、トニック・ソルファ譜の読み方を説明した上で、履修生全員で掛図から歌うという時間を毎年持っている。
- ⑭ 斜め上方からの俯瞰写真であるため、紙の凹凸等で記載内容を読み取れない部分が多い。
- ⑮ 2014年12月11日に図書館本館で撮影した。お世話下さった図書館貴重資料担当の石村真紀さんに御礼申し上げます。
- ⑯ 今後はこの表1の番号順に資料が命名・管理されることが望まれる。
- ⑰ 'Commencement at Kobe College Music', in *Life and Light for Woman* (Boston: Woman's Board of Missions, co-operating with the American Board of Commissioners for Foreign Missions), Vol.27 (1897), p. 579.
- ⑱ 武石みどり「音楽教育家エミリー・ソフィア・パットン」東京音楽大学『研究紀要』第28号（2004年）1-31ページ。
- ⑲ 問合せに応じて下さった東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター大学史史料室特任助教の橋本久美子氏、東京音楽大学教授の武石みどり氏、フェリス女学院資料室の鈴木慶子氏、梅花学園資料室の安田行秀氏に御礼申し上げます。

（音楽学部教授）